

## ストーンマナーの島で

山川和宏

(平成 20 年度 1 次隊 小学校教諭 ミクロネシア)

---

平成 20 年度 1 次隊でミクロネシア連邦のヤップ島コロニアミドルスクールに派遣されました山川和宏と申します。今は兵庫県の尼崎市で小学校の教員をしています。

はじめに自分が協力隊に参加した動機なんですけど、協力隊に参加するまで一度も海外に出たことがなくて、自分の殻を破りたいな、自分が変化したいなと思って志望しました。それともう一つ、もう 10 年以上前になるんですが、北海道の富良野塾というところで 2 年間勉強していたんですけど、2 年間一つのことを打ち込んだ生活が忘れられなくて、それと似たにおいを協力隊に感じて志望、参加させて頂いたんです。実際、自分が変わったかどうかは最後にお話しするんですが、多分協力隊に参加する前の自分だったらこうやって人前でお話する側に進んで出ようは思わなかったのも、そういった面ではちょっと変わったのかなということも思います。

僕が行ったミクロネシア連邦というのは、日本からずっと南に行った北半球なんですけど、矢印のところらへんにあって 607 の島があります。ほとんど無人島なんですけれど。公用語は英語それに現地語です。

これがミクロネシア連邦の大まかな地図なんですけど、4 つの州にわかれているそれぞれの州で言葉も違うし文化も違います。例えばコスラエの方だと敬虔なカトリックの島でも田舎です。ポンペイの方は首都があって一番栄えています。チュークは人口が一番多いんですけどインフラが全然整備されていない。ヤップは一つだけぽつんと離れておりまして古くからの伝統をととても重んじているそういう島です。

これがヤップ島です。車で一時間あれば回れるような小さい島です。人口 8 0 0 0 人くらいでここも英語が使われているんですが、日常生活はほとんどヤップ語が使われていません。

これはヤップで 1 番重い石のお金です、今も実際に使われています。例えば不動産、土地のやり取りだとか結婚するために持っていったりだとか、重くて持っていけないんですけど、使っています。この価値っていうのは大きさを比べている訳ではなくて、お隣のパラオという島からこの石を運んでくるんですけど、そのときにどれだけ大変だったかということで価値が決まります。例えば嵐の中必死で持ってきたりとかということで価値が決まるので、しかもそれを話す人のプレゼンのうまさでも価値が決まるのでまあ話し上手な人の石は価値が高い、そういうお金です。それを運んできたカヌーが下の方なんですけど、これにも時々自分も乗らせてもらいました。

あとヤップというのは男と女がなかなか一緒にいられないというか、そういう島です。

ここはメンズハウスというんですが女性は決して立ち入れない建物です。逆に女性しか入れない建物もあります。

向こうの方では基本的に伝統的な衣装を着ています。21世紀というか今世紀に入ってだんだんTシャツとかきるようになったので基本今はTシャツを着て、伝統的なラバラバというんですけどスカートをはいたりしています。自分はホームステイをしていました。

最初にホームステイを半年ほどしてそれからアパートに移ったんですが、最初にホームステイしたところでいろんなしきたりであるとか価値観というものを教えてもらってとてもよかったと思っています。ここに住んでいた家です。

食事ですね、みての通りですねあまりおいしくないです。これはごちそうです。前の日にパーティーがあってホームステイ先で出してもらったごちそうです。バナナとか芋とかココナツとかキュウリとかシーチキンとか、そういったものがけっこう出てきます。

あと給食がなかったので学校ではこうやってラーメンの袋にお湯入れたり、そのままチキンラーメンみたいにぼりぼり食べたりします。これが主食のタロイモです。かなりでかいです。

ご飯はこうやって色塗るんです。オレンジ色とか青とかピンクとか、ちょっとこういう色塗られると食欲が無くなるなと思っています。

これもそうです。左下がウミガメ、右がわかりにくいんですがコウモリです。もうよっぽどのときにしかでないごちそうです。

自分が犬を飼ってたこともあって食べてはいないんですけど、たとえば昨日までかわいがっていた飼犬が次の日に食事に出てきたりとか結構あったみたいです。あとうなぎというのは食べちゃいけないものなんです。向こうではうなぎというのは身分の低い人が食べるものということで決して食べてはいけないものといわれています。お隣の島なんかは逆に神様の使いだから食べてはいけないとかという事になっています。で試しに自分はうなぎパイを向こうの人に食べてもらったんですけど「うまいうまい」って言って食べていました。ただそれ何でできているの？と聞かれて、うなぎが入っているっていったらペって吐き出していました。それほど食べてはいけないものみたいです。

あともうひとつこれは結構ヤップというかミクロネシアで有名なんですけど、ビートナツって言ってピンロウ樹という木の実に、白いのは石灰です。石灰をまぶして噛むととても気分が良くなるということで、向こうの人は四六時中食べてます。で食べると唾液が赤くなって血みたいになるんですけど、それは飲み込んだらいけないのでみんな吐き出しに、例えば授業をしていても子供が噛んでたら授業中唾を吐きに外でたり、先生が外に出たり、これはかなり悩まされました。ただこうやってビートナツをわくわくしてみんな噛むのが向こうのコミュニケーションというか話の場、団らんの場合だったので自分も食べるというか噛んで、参加させてもらったりしたんですけど、これをかむと石灰なので歯が解けていくんですよ、だから向こうの40代30代ぐらいの人はもうほとんど歯がなかったりします。それでもやめられないみたいです。

あと左側のはサタオといって太平洋の島では結構飲まれているものですが、衛生的でないのでこれをのんでたとえば赤痢になったりとか、そういったことも起こってるので飲むときは重々注意して飲んだ方がいいと思います。右側はココナツで造ったお酒です。かなりおいしいです。自分はお酒を飲めないのほとんど飲まなかったんですけど、ほんのり甘いおいしいお酒です。

戦跡、これ日本軍のものなんですけど、アジアの島々ですと日本が否応なくその土地の人たちを巻き込んだんだなということを実感させられます。基本的に自分が暮らしていたヤップの島の人たちは日本人のことをとてもよく思ってくれていて、大好きって言うてくれるんですけど、戦争の話になるとやはりいろいろと言われたりということもありました。

狭い島なので余暇がやはり限られていて、これはダイビングと釣りの絵なんですけど、やはり毎週末できる訳じゃないので休みのときの時間のつぶし方というか過ごし方はかなり悩まされました。

あとこれが伝統的なダンスの写真です。ヤップダンスと言って。自分が一番後悔しているのはこういうダンスとか向こうの伝統的な技能をもっともっと学んできて、こっちに帰ってきたときに、例えばちょっと踊りを教えてみたり踊れてみたりできたらよかったんですけど、いつでもできると思っているうちに隊員生活が終わってしまって、それを今でも後悔しております。

以上が日常生活というか向こうの暮らしのことでした。まあ食事に苦労したり余暇の時間に苦労したり、あとヤップっていうのは首都とめっちゃめっちゃ離れていまして、飛行機を乗り継がないと行けないんですけど、首都にあがるのに地理的にもそうなんですけど金銭的な苦労、10万円くらいかかるのでなかなかプライベートで首都にあがってほかの隊員と情報交換するというのができなくて、苦労させられました。あととにかく暑いです。毎日30度以上です。あとヤップ時間というか、向こうの人たちの時間の感覚が結構やはりゆったりとしていて、例えば12時に待ち合わせしたら夕方にきたりだとか夕方に待ち合わせしたらもう夜中にきたりとか、そういう時間の流れです。軽いホームシックもあったんですけど、基本なれました。自分もルーズになったし人ってなれるもんだなあってことを学びました。

ここから活動の話なんですけど、自分が活動していたコロニアミドルスクールというのは1クラス40人くらいの、向こうでいう中学校です。

時間は毎日同じでこういう校舎、ここにあるのがチャイムです。こういう棒でガンガンでならしてチャイムにしていました。その反面結構コンピュータが入っていたり、トイレは小さくて、向こうの人ってトイレをほとんど使わなくて草むらでしてました。

休み時間なんかは縄跳びしたり石をつかって遊んだり、日本の遊びも結構残っているの、花札したりボール遊びしたりお手玉したりフットボールしたりキャッチボール、これ

すごいなと思ってるんですけど、お手製のグローブを作ってキャッチボールしたり遊んでました。あとこれはペットボトルを瓶にしたりとかアイデアがすごいなあと思いました。このナイフ、何かというと鉛筆削りです。これで鉛筆削っているんです。でも誰も怪我しないし日本でこんなんで鉛筆削ってたらしばかれますけど、すごいなと思いました。

この二人は何かというと同級生です。向こうでは留年があるので10歳の子と17歳の子が一つの教室で学んでいたりとかしていました。こういう形なんですけどこれはちょっと飛ばします。

日本の学校との違いなんですけど、生徒指導というのは担任はしなくて、例えば何か問題が起こったらその子を校長室に行かせて校長に指導してもらいます。あと留年と退学がありますので、何か問題を起こした子はもうやめさせるっていうこと、夏休みは長いです。3ヶ月休んで教えたことはみんな忘れてます。あとスパイラル方式のカリキュラムというのは、休んで教えられたこと忘れるからまた同じことを繰り返すという、そういう意味です。向こうは日本でいうハネるが○なんです。だから○をつけるとこれはバツなのっていわれて、どっちがマルだかバツだかわからなくなることもありました。

ちょっとまじめな話をここからするんですけど、ヤップでどういう活動をしていたかという主には算数のことをやってきました。算数の授業改善ということで直接生徒に教える、あと担当教師への教え、1年目は主に自分が教える形にして、2年目は主にサポートに回るようなそういう感じで活動していました。あと算数学力テストというのは、自分が初代の隊員だったので、向こうの配属先の人が僕が何しにきた人なのか全然わからなかったんで、とりあえず1ヶ月で結果を出そうと思って、1ヶ月必死で教えて学力テストをやりました。1ヶ月前と1ヶ月後のテストをやってこんなに上がったろって言って、一緒にこうなるようにがんばろうっていうのを話したりしました。あとは教員向けの指導力向上のワークショップをしたり、あと体育、体育がなかったんですよ。

なので向こうの人はかなり運動不足で体も固いし体も肥満というか大きい人が多かったんで、少しでも運動できるように、ただ毎日30度超える炎天下なので1時間体育やるっていうのはかなり大変で、ちょっとずつちょっとずつ始めて行って、2年かけてようやく小さな運動会ができたというそういう状況です。

あと放課後学習をやりました。これが一日のタイムスケジュール、びっしり埋まっているように見えますが、例えば雨が降ったら体育がなかったり、午前中の授業も自分が全部教える訳ではないので、そこまで慌ただしいという訳ではなかったです。

算数で何が問題になっていたかということ、いろいろあるんですが一番は基礎的な計算力が身に付いていないということです。中学2年生になっても九九ができない、っていうことがありました。なのでいろんなことに手を出していったんですけど、まずは基礎的な計算力を身につけなきゃいけないということで、低学年だったらもっと違うことがあったかもしれないんですけど、高学年になってそこまで戻れなかったんで、まず基礎計算力を身

につけるということでドリル学習をしました。計算タイムといって算数の授業の最初の 5 分間とにかく計算問題をやるっていう時間を取りました。その中で取り組んだ一つがこれ、九九の表なんですけど、これを書かせる。まず 6 年生の子にやらせたんですけど最初は全然できずに、回数を重ねていって、それを記録に書かせていくうちに最初は 36 人中 3 人しか 3 分以内に九九の表を埋めれなかったんですけど、10 回繰り返したら 32 人埋めれるようになりました。10 回目からは 3 分というのを 2 分に縮めて、10 回やらせたら 27 人の人が 2 分以内にできるようになったので、やってなかっただけでやればできるんだなということがわかりました。

そうやって基礎の計算力が身に付いたところで、また学力テストをやりました。問題は学年によってかえてまいす。5 年生の問題は日本でいう小学校 2 年生レベル、6 年生は 3 年生レベル、7 年生は 4 年生レベル、8 年生は 5 年生レベル、で九九の特訓をしたのは 6 年生なんですけど、6 年生はやはり伸びたので基礎の計算力が身に付けばだいぶ変わっていくんだなということを感じました。

その成果というかノウハウというのをワークショップでヤップ島内でまずやって、それから 2500 キロ離れたコスラエっていう島から呼んでもらったので、そっちに行ってヤップでこんな実践していますっていうのを発表したりしていました。そうしたらヤップよりもコスラエの人たちの方が興味を持ってくれて、計算タイムという言葉が定着していて今も実践、続けてくれているみたいです。

直面した課題は先生のやる気がないということ。やる気が無いのは教員は、ま日本もだんだんそうなりつつありますが、社会的にあまり認められていないというのがあります。子供に夢を聞くと先生になりたいっていう人はいないんです。スーパーの店員になりたいとかそういう夢を語ってくれるんですが、先生になりたいという人はいないです。だからどんどんどんどん辞めていきます。自分がこの人にくっついてよっていわれたカウンターパートはもう定年間際でした。2 年後やめるってわかっていました。なのでどうしようっていうのがあったんですけど、そのカウンターパートがとってもいい人で自分の好きにやらせてくれたので、その先生のクラスでまずいろんなことを試みさせてもらって、うまくいったことをほかの先生に伝えていくというような形でやらせてもらいました。

失敗なんですけどまずこれ 1 こめの失敗です。何かというと自分で教えすぎました。結局自分が帰ってから何が残るかということなんですけど、自分ばかりやっちゃうと先生たちにそれが残っていかないということですね。協力隊という言葉はほんとだなと思ったんですけど、協力、お互いが協力し合うことが大事なんだなと思いました。もう一点は初めからいろいろ試みすぎない、じつはさっきの写真はよその学校で教えていたんですけど、よその学校に行ったりあるいは大学に行って、今度先生になる人に教えたりっていうことを最初からやってるうちに手が回らなくなりました。はじめはやはり自分がその島、あるいはその任地の生活に慣れていくということも大事なので、最初から飛ばしすぎるとけっこう大変だと思います。

あと失敗その2、これは日本から取り寄せたものでそろばんと顕微鏡です。顕微鏡は役に立ったんですけど、物品の援助は計画的にやった方がいいなと思いました。結局ものもらうということに対してもらったらもちろんうれしいんですけど、何でもものに頼るようになって、前の写真で段ボールを使ってキャッチボールをしてるっていうそういう写真を見ていただいたんですが、そういう向こうにあるものでもなんぼでも工夫すれば利用できる。例えば体育にしてもペットボトルでジャグリングやったりボーリングやったりできる。そういったことがあったので、何でもものに頼るのはどうかなと反省しました。あとそろばんなんかもやっているときは良かったんですけど、じゃあ自分がいざ帰ってそのあと現地の人だけで管理運営できているのかっていったら実はできていなくて、それも自分の失敗だと思っています。

失敗その3は、これはコスラエのワークショップの別の島でやったワークショップのことなんですが、実はそこに至るまで紆余曲折がありまして、かなり初期の段階でやりたかったんですけど、事務所のボランティア調整員の方となかなか人間関係うまく築けなくて、その方がいるときはうまくいろんなことをお願いできなくて、その方が移ってようやく実現できたということがありました。もちろんお互い人間なのでお互いに至らない点があったんですけど、人間関係がうまく行っていた方が活動はスムーズに行きます。それは現地の人もそうだし隊員同士もそうだと思います。

自分の中の成長としてはまず語学コミュニケーション能力の向上、まず帰ってきて向こうではずっと英語だったのでまずTOEICの試験受けました。リスニングは100点以上あがっていましたが、逆に文法の方は下がってしまいました。でも向上したんだなと思います。あと一人では何にもできないので、何でも一人でやろうとしなくなった。で日本の良さがよくわかりました。日本の食事はおいしいです。ただ根本的には変わってないのかなぁと思います。そんなに、自分の中のこういった部分は大きくなったああいった部分は大きくなったというのはありますけど、結局自分という人間は変わらなかったなと思います。これからなんですけど、これはおすすめなんですけど帰国後の職場復帰については自分から伝えた方がいい、もとの所属先に戻るのか別の学校に移るのかというのは、自分から伝えておいた方がいいと思います。自分は元の配属先に戻ったんですけど、また1年で別の学校に出なきゃいけないということが事前に決まっていたらしくて、それを知らなくてまた1年で移らなあかんということでちょっと苦労しました。

あと協力隊の体験をどうやっていかしていくかは自分次第。周りはそのままで期待してないです。自分がやればできるし、自分がやらなければ何も出来ない、自分はどうしてもやりたかったんで日本の小学校の先生たちに自分の活動を話したりっていう機会を持ったんですけど、それも自分が言い出さなければできなかったんで、結局自分次第だなぁと思います。あと向こうで活動しているうちから買っておくと、使えそうな物品を身につけておくということですね。

これは向こうでただで飲めたヤシの実が新宿で 700 円で売ってました。びっくりしました。ご清聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

質問：報告とは関係ないのかもしれないのですが、資料の最後の表はなんでしょう。

先生：これが学力テストの結果で、一部ちょっと消えちゃってるんですけど、どういう問題をどれくらいの子ができたかということで、例えば算数 A ってやつは足し算引き算かけ算割り算、そういった問題をどの学年の子がどれくらいできてるかということなんです。やはりかけ算割り算が入ると急にできなくなる。足し算引き算はまだできるんだけどかけ算が入るとできなくなる、割り算が入るとできなくなるということで、まず九九をやる、どこが弱点か、どこをまずやってかなきゃいけないのかというところを見つけるのに参考にしました。だんだん複雑な問題になっていくと全然できないので、下の方はかなり点数悪いんですが、見てなかなかわかりやすすくないと思うんですけど、学年があがったからできるというもんでもなかったんです。できないところは学年があがっていてもずっと課題になっているということが発見で、早いうちに例えば九九であるとかかけ算であるとか、そういったところを押さえなあかんということを確認するのにも役立ちました。

質問：活動が波に乗ったというか、これに集中していこうと思った時期について

先生：向こうは夏休みで年度が替わるんですよ、9月から、どこもだいたい日本以外はそうなのかもしれないんですけど1年目終わって、3ヶ月の夏休みの間、何も子供たちに直接教えるっていうことができなくてその間に次こうしてやろう、ああしてやろうっていう準備を比較的ゆっくりできたこと、やはり毎日毎日だといろんなことに追い立てられて、立ち止まって考えることがなかなかできなかったのも、そうやって立ち止まって考える時間を持てたことが一つ自分の中では大きな変化になったと思います。